

から

学会



「エメラルドの島」と呼ばれる自然の美しい国アイルランドの首都ダブリン

で、10th World Computer Congress. が九月一日から五日間開催された。この会議はIFIPの主催で三年に一度開かれるもので、六年前の第八回は東京だった。会場となったダブリン大学トリニティカレッジは一五九一年にエリザベス一世が創設した伝統ある大学で、学会のアカデミックな雰囲気がいっそう極だった。

さて、参加者は約二二〇〇人(海外八〇〇人)で前回のパリより少ないように思われたが、発表内容は充実していた。一時、間半のセッションが九十六あ

人工知能の発表が多い

第10回 世界コンピュータ会議

り、そのうち招待講演が五十、パネルが二十三、投稿論文発表セッション二十三(論文数は六十九)であった。
今回の特徴は人工知能(AI)関連の発表が急増したところである。ハードウェアから

応用までの研究分野を十エリアに分けた中にはじめてAIエリアが新設され、十セッションを占めたほか、他のエリアでもAI技術応用等十数件の発表があった。内容は、Prologなどの論理型言語の機能拡張・実行方式・応用、AI言語、エキスパートシステム構築ツール、知識ベース、設計エキスパートシステム等々である。三年前の前回に比べると基礎・理論に加えて応用・ツールの発表が目立った。なお、日本からのAI分野の論文は処理言語SuperLONLIについて発表した。異なる手法を融合して汎用性を高めるアプローチはJ. Mc Dermott, J. Robinson, L. Steele

等も招待講演で言及していた。その他、ソフトウェア工学エリアのセッション数が十三で最も多く、プログラミング方法論エリアでは仕様記述関連の発表が集中するなど、ソフトウェア技術への関心は高い。
比較すると、投稿論文は十対十だが、パネラーは九対二十、招待講演者は二対十五と圧倒的に米国が多く、日本は基本技術ではまだまだ学術的貢献が少ないと思われる。
(五部三一〇U
中所主任研究員記)